

## 外国語科

単元の評価規準の作成について

### (1) 評価規準作成の考え方

外国語科の目標は、次のように示されている。

「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う。」

この目標にしたがい、外国語科の評価の観点としては以下の四つの観点が示されており、それぞれが、次のように上記の目標に対応している。

観点	目標
ア コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り」
イ 表現の能力	「聞くことや話すことなどの実践的コミュニケーション能力の基礎を養う」
ウ 理解の能力	
エ 言語や文化についての知識・理解	「言語や文化に対する理解を深め」

これらの目標や評価の観点の中では、**特に目標の「実践的コミュニケーション能力の育成」、評価の観点としてはイ「表現の能力」、ウ「理解の能力」に重点をおいている。**

国立教育政策研究所教育課程研究センターにおいては、平成12年12月の教育課程審議会答申を受け、平成14年度からの小・中学校の新しい学習指導要領の実施に向け、評価規準、評価方法等の研究開発を進められ、平成14年2月にそのまとめが報告された。

外国語科においては、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の内容のまとめりに評価規準が作成されている。

このホームページで示す具体例では、この「内容のまとめりの評価規準」及び「内容のまとめりの評価規準の具体例」を参考に具体的な教科書の単元における評価規準を明確にした事例を示した。

### (2) 評価規準作成の手順

< 「聞くこと・話すこと」を重点とした単元の評価規準作成事例 >

単元名：第3学年 LESSON 5 Show and Tell (NEW CROWN ENGLISH SERIES 3)

重点をおく言語活動の指導事項

「聞くこと」(エ) 話し手に聞き返すなどして内容を正しく理解すること。

「話すこと」(イ) 自分の考えや気持ちなどが聞き手に正しく伝わるように話すこと。

**手順1**：【単元に関連する評価規準を明確にする】

本事例は、「聞くこと」「話すこと」を重点とする単元であることから、国立教育政策研究所教育課程センターが示した「内容のまとめりごとの評価規準」を活用し、下記のようなになる。

	ア コミュニケーションへの 関心・意欲・態度	イ 表現の能力	ウ 理解の能力	エ 言語や文化につ いての知識・理解
聞 く評 価 と規 準	言語活動に積極的、 意欲的に取り組んで いる。		初歩的な英語の情報 を正しく聞き取るこ とができる。 初歩的な英語を、場 面や状況に応じて適 切に聞くことができ る。	言語や言語の運用に ついての基本的な知 識を身に付けてい る。
話 す評 価 と規 準	さまざまな工夫をす ることで、コミュニ ケーションを続けよ うとしている。	初歩的な英語を用い て、自分の考えや気 持ちなどを正しく話 すことができる。 初歩的な英語を用い て、場面や相手に応 じて適切に話すこと ができる。		初歩的な英語の学習 において取り扱われ た文化について理解 している。

**手順2**：【単元の評価規準を設定する】

手順1で作成した評価規準を基にして、「単元における評価規準」を設定する。

単元における評価規準の内容は、単元の指導目標の実現を目指して指導してきた結果、生徒に身に付いた資質や能力を評価するための観点ごとの目指す姿であり、手順1で示した「内容のまとめりごとの評価規準」をより具体化したものとなる。その際、国立教育政策研究所教育課程センターが示した「内容のまとめりごとの評価規準の具体例」を参考にする。

(言語活動への取組) ・聞き返したり、説 明を求めたりしな がら、類推力をは	(正確な発話) ・強勢、イントネー ション、区切りな どに留意して、内	(正確な聞き取り) ・強勢、イントネー ション、区切りな どを手がかりにし	(言語についての知 識) ・関係代名詞の後置 修飾、接触節を含
---	--	--	--

<p>単元の評価規準</p>	<p>たらかせて聞こうとしている。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・英文の内容構成を意識しながら、論理的に話そうとしている。</li> </ul> <p>(コミュニケーションの継続)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ジェスチャーや実物を使ったり、別の表現で言い換えたりして、相手の理解を促す工夫をしながら話そうとしている。</li> <li>・話題のつながりを意識して、内容を深める質問をしたり、一文付け加えたりして対話しようとしている。</li> </ul>	<p>容が正しく伝わるように話すことができる。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・3段階の内容構成で、メモを見ながらジェスチャー等も用いて、内容が正しく伝わるように話すことができる。</li> </ul> <p>(適切な発話)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の理解を確認したり、聞かれたことに対して既習の表現を用いたりするなど、相手に応じて話すことができる。</li> </ul>	<p>て、内容を正しく聞き取ることができる。</p> <p>(適切な聞き取り)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の宝物の3段階の内容構成について、大切な単語に着目しながら理解することができる。</li> <li>・聞き取れなかった部分やさらに聞いてみたい内容について、繰り返しを要求したり、質問したりして理解することができる。</li> </ul>	<p>んだ英文の構造上の特徴を理解している。</p> <p>(文化についての理解)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・具体物を説明する際の英文の流れから、一般的な結論をまず述べ、次に説明で具体化する英語の発想を理解している。</li> </ul>
----------------	--	--	--	--

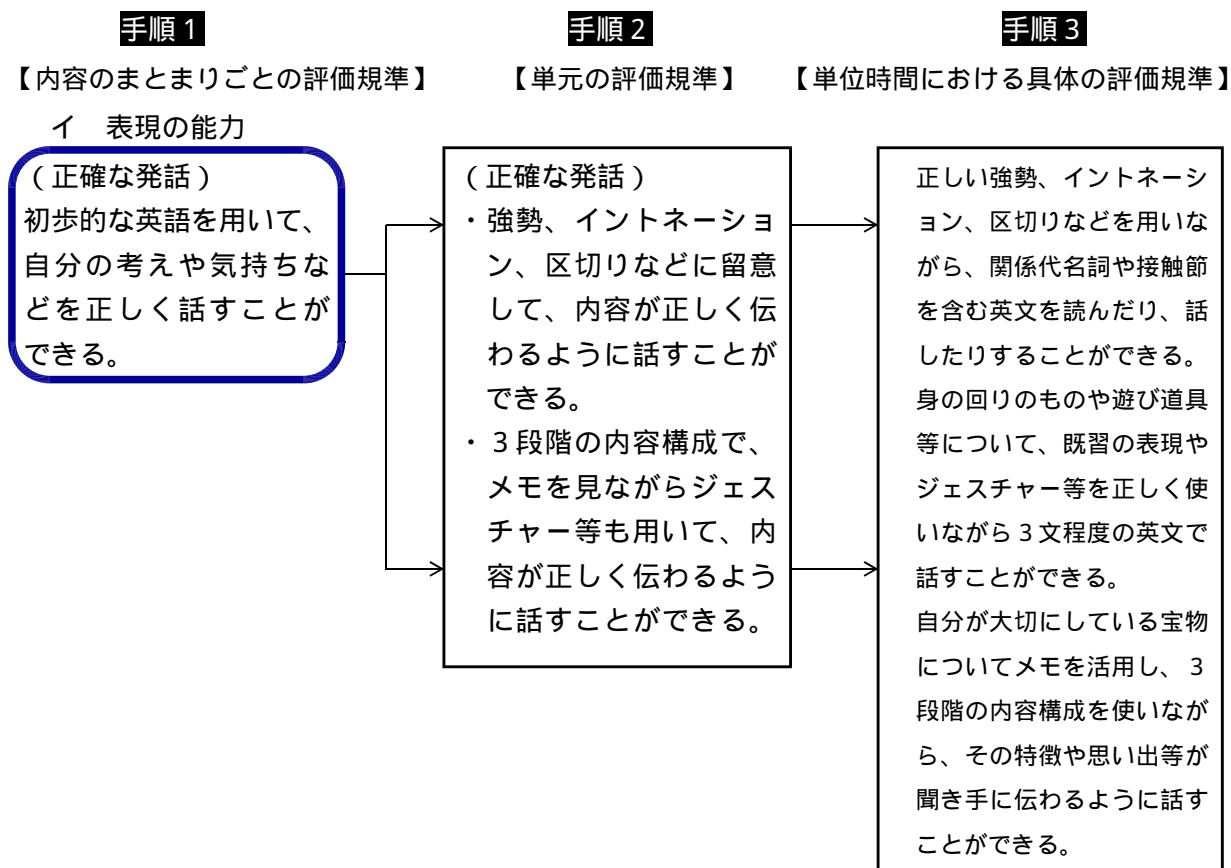
**手順3 :【単位時間における具体的評価規準を作成する】**

手順2で明らかにした単元の評価規準を、毎時間の指導目標と指導内容を踏まえて具体化する。

	ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 表現の能力	ウ 理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
<p>単位時間に</p>	<p>身の回りのものや遊び道具等について、既習の表現やジェスチャー等を手がかりにしながら、聞き取るようとしている。</p>	<p>正しい強勢、イントネーション、区切りなどを用いながら、関係代名詞や接触節を含む英文を読んだり話したりすることができる。</p>	<p>強勢、イントネーション、区切りなどに留意しながら関係代名詞や接触節を含む英文の意味や形態を把握することができる。</p>	<p>関係代名詞の後置修飾と接触節の働き、文構造や意味について理解している。</p> <p>物の特徴や働き等</p>

<p>おける具体の評価規準</p>	<p>身の回りのものや遊び道具等について、実物を示したり、ジェスチャー等を使ったりして相手に伝えようとしている。</p> <p>身の回りのものや遊び道具、自分の宝物について、メモを活用したり、3段階の内容構成に留意したりしながら、聞いたり伝えたりしようとしている。</p> <p>仲間が大切にしている宝物についてわからないところを聞き出す質問をしたり、さらに説明を求めたりなどしながら聞き取るようとしている。</p> <p>自分が大切にしている宝物について一文付け加えるなどして話題をつなげながら話そうとしている。</p>	<p>きる。</p> <p>身の回りのものや遊び道具等について、既習の表現やジェスチャー等を使いながら3文程度の英文で話することができる。</p> <p>自分が大切にしている宝物についてメモを活用し、3段階の内容構成を使いながら、その特徴や思い出等が聞き手に伝わるように話することができる。</p> <p>話した内容についてのペアからの質問に対して、既習の表現を駆使したり、相手の理解を確認したりしながら、適切に応じることができる。</p>	<p>身の回りのものや遊び道具等について、後置修飾の文構造や内容語に着目して、聞き取ることができる。</p> <p>身の回りのものや遊び道具等について、その特徴や働き等を箇条書きに整理しながら、聞いたり読んだりして理解することができる。</p> <p>身の回りのものや遊び道具、お互いの宝物について、分からなかったところは聞き返したり、さらに知りたいところは質問したりしながら、話し手の思い入れを理解することができる。</p>	<p>を説明するときに接触節を使うと、簡潔に表現できるというよさに気付いている。</p> <p>具体物を説明するときに、まず全体的な結論を述べ、さらに具体的に説明していくと論理的に説明できるという英語の発想に気付いている。</p>
-------------------	---	--	---	---

以上、**手順1**から**手順3**へいたるまでの評価規準の関連性が大切になる。その流れの例を簡易図に示すと次のようになる。



【補助資料】

新学習指導要領に基づいた指導計画及び評価について

1 評価の各観点の関連について

外国語科では、「実践的コミュニケーション能力の基礎を養うこと」が重要な目標として設定されているので、イ「表現の能力」やウ「理解の能力」が重要な評価の柱となる。

また、「表現の能力」「理解の能力」を発揮するためには、その言語のもつ仕組みや意味、働きに応じた表現といった言語についての知識や、背景となる文化を理解することは、適切な言語の運用という視点からも重要である。

さらに、実践的コミュニケーション能力は、積極的に言語を使用する態度がなければその能力を発揮することも伸長することもできない。積極的に自分の考えなどを相手に伝えようとしたり相手の考えなどを理解しようとする態度があつてコミュニケーションが成立するわけである。

これらのことから、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」や「言語や文化に対する知識・理解」は、「表現の能力」及び「理解の能力」と関連させて考える必要がある。

また、新学習指導要領では、各学年とも特に聞くこと及び話すことの言語活動に重点をおいて指導することとしているので、「表現の能力」及び「理解の能力」の評価を考える際には、「話すこと」及び「聞くこと」に重点をおく必要がある。

## 2 観点別学習状況の観点の趣旨について

### ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度

この観点は、コミュニケーションに関心をもち、積極的にコミュニケーションを行おうとする態度を身に付けているかどうかを評価するものであり、一般的な英語学習に対する関心・意欲・態度ではない。

したがって、生徒が実際にコミュニケーションを行う場を設定し、その状況を観察しその累積等から評価する必要がある。今回、この観点の趣旨に「積極的に言語活動を行い」という文言を付け加えられているのも、コミュニケーション能力の育成にとって重要な言語活動への取り組み状況を評価対象とする必要があることを示すためである。

### イ 表現の能力

この観点は、生徒が外国語を用いて話したり書いたりして意味を伝える能力を評価するものである。したがって、生徒が実際に話したり書いたりする言語活動を通して評価するものであり、表現するために用いる言語材料についての知識の有無を評価するものではない。

この観点では、話し手や書き手が自ら伝えようとする内容が大切になる。今回、趣旨に「気持ち」や「伝えたいこと」が付け加えられているのはその点を明示するためである。

表現の能力には「話すこと」と「書くこと」の領域が含まれるが、音声によるコミュニケーションが重視されていることから、評価においても指導にあわせて「話すこと」の重視が求められている。

### ウ 理解の能力

この観点は、生徒が外国語を用いて聞いたり読んだりして、その内容を理解する能力を評価するものである。したがって表現の能力と同様、生徒が実際にそのような言語活動を通して評価するものであり、理解するために必要となる言語材料についての知識の有無を評価するものではない。

この観点では、話し手や書き手が相手に伝えようとするものが何であるかを理解することが大切になる。今回、趣旨に「具体的な内容」や「相手が伝えようとする内容」を付け加えられているのもそのような視点を大切にするからである。

理解の能力には「聞くこと」と「読むこと」の領域が含まれるが、表現の能力と同様、音声によるコミュニケーションの重視から「聞くこと」の評価の重視が求められる。

### エ 言語や文化についての知識・理解

この観点は、生徒が外国語の学習を通して、言語や文化について、どの程度知識を身に付け、また理解しているかを評価しようとするものである。

この観点には、語彙や音声、文法などの言語構造、表現などについての知識が含まれる。今回、趣旨に「運用についての知識」が付け加えられているのは、言語をコミュニケーションの手段として使用するうえで必要となる運用についての知識を大切にするためである。

また、言語を使用する場合にその前提となる文化についての知識も適切な言語使用という観点から無視することはできない。この観点では、言語使用にあたって必須となる知識を評価しようとするものである。

### 3 必修教科「外国語」の評定と選択教科「外国語」の評価について

#### 必修教科「外国語」の評定

必修教科「外国語」の評定は、今まで観点別学習状況による絶対評価を加味した相対評価が5段階で示されてきた。

今回は、評定までも絶対評価で行うこととしたことは、集団に準拠した5段階ではなくなることに留意する必要がある。

そのために、現在の観点別学習状況の評価の在り方を再検討し、絶対評価による評定がより信頼できるものとなるよう、4つの評価の観点にそれぞれ適切な評価規準を設定していくことが重要である。

#### 選択教科「外国語」の評価

選択教科「外国語」は、生徒の特性等に応じて多様な学習活動を展開するものであり、評価に当たっても、このような学習の趣旨を生かすよう配慮する必要がある。

選択教科の内容については、学習指導要領の第2「目標及び内容等」で示されている内容だけでなく、生徒の実態や特性などを踏まえて、各学校が適宜定めた「言語活動」や「言語材料」などを含めてよいことになっている。

また、学習活動としては、「課題学習」「補充的な学習」「発展的な学習」などを例示している。

「課題学習」としては、生徒自ら学習課題を設定し、指導や助言を受けながら学習を進め、その結果をまとめて発表し合うなどの学習活動が考えられる。

「補充的な学習」としては、コミュニケーション能力の基礎となる「言語材料」の中で理解が十分できていないものや、「言語活動」のうち不十分なものなどを特に選んで基礎をより定着させるなどの学習活動が考えられる。

「発展的な学習」としては、生徒の学習状況や興味・関心などに応じて学校で適宜定めたやや高度な内容などを取り扱った学習活動が考えられる。

このように、選択教科の趣旨を踏まえて生徒の特性や実態などを生かした多様な学習活動を各学校が創意工夫し、特色ある教育活動ができるようにすることが大切である。

したがって、各学校がこのような選択教科としての「外国語」の基本的な枠組みや内容を十分理解し、その活動内容に応じた適切な観点を設定することが重要である。